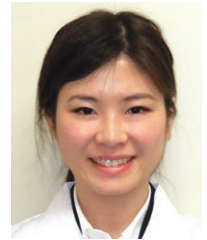


くすりばこ

薬剤部
主任薬剤師
渡邊 寛子



112. 認知症のおはなし

高齢化社会が進行している現在の日本において、65歳以上の方は5人に1人が認知症になると予測されています。身近な人や、自分自身も将来認知症になる可能性は少なくありません。誰しもがなりうることから、認知症への理解を深めていくことが重要となります。

認知症とは、一度正常に発達した認知機能が後天的な脳の障害によって持続的に低下し、日常生活や社会生活に支障をきたすようになった状態のことを言います。認知症にはアルツハイマー型認知症、レビー小体型認知症、脳血管性認知症など様々な種類があります。最近では、生活や仕事に支障をきたさないような軽い症状でもMCI(軽度認知障害)などの早期診断がなされるようになりました。早期診断・早期予防も大切なことではありますが、早期発見による服薬開始が認知症をなおしていくとは限りません。抗認知症薬として使用されている薬剤は残念ながら根本の治療をする薬剤ではありません。認知症の進行を遅らせていくことが期待されています。

薬物療法として、現在日本ではドネペジル(アリセプト®)、ガランタミン(レミニール®)、リバスチグミン(イクセロン®・リバスタッチ®)、メマンチン(メモリー®)の4種類の薬が承認されています。アルツハイマー型認知症に対する薬が主です。



アルツハイマー型認知症とレビー小体型認知症では脳の中にあるアセチルコリンという神経伝達物質が減少しています。神経伝達物質とは、神経と神経の情報のバトンタッチに必要な物質で、減少すると脳のネットワークがうまく働かなくなります。そのため、アセチルコリンを分解するアセチルコリンエステラーゼを阻害し脳の中でアセチルコリンが減少することを防ぎます。具体的にはドネペジル(アリセプト®)、ガランタミン(レミニール®)、リバスチグミン(イクセロン®・リバスタッチ®)の3つがその作用を持っています。

アセチルコリンエステラーゼ阻害薬のほかに、NMDA受容体拮抗薬があります。唯一のNMDA受容体拮抗薬である薬剤はメマンチン(メモリー®)です

NMDA受容体とはグルタミン酸の受け皿となるものです。グルタミン酸とは脳内において記憶や学習にかかわる神経伝達物質という役割がありますが、認知症の方の脳内では異常なたんぱく質によって記憶のシグナルが妨害され記憶することが困難になってしまいます。そこで、メマンチン(メモリー®)には過剰なグルタミン酸の放出を抑え、脳神経細胞死を防ぐ働きがあります。

それぞれの薬剤の特徴を活かし、認知症の進行度、副作用に注意しながら個々の患者さんにあう薬剤を選択していきます。

一般名	ドネペジル	ガランタミン	リバスチグミン	メマンチン
剤形	錠剤・OD錠※ ¹ ・DS錠※ ² ・細粒・ゼリー	錠剤・OD錠	貼付剤	錠剤・OD錠・DS
作用機序	ChE※ ³ 阻害	ChE阻害	ChE阻害	NMDA受容体拮抗
主な副作用	悪心・嘔吐・下痢	悪心・嘔吐	皮膚症状	めまい・傾眠・頭痛

※1: 口腔内崩壊錠

※2: ドライシロップ

※3: アセチルコリンエステラーゼ



薬物療法以外には、非薬物療法もあります。そこで、非薬物療法の代表的なものを挙げていきます。

回想法: 認知症では遠い過去の記憶は喪失しづらいという特徴があり、その点を利用して過去の思い出を共有する作業療法を回想法といいます。自分の思い出話をする事で脳に刺激を与えると同時に精神的安定を図ることができます。



運動療法: 気軽にできる運動療法の一つに散歩があります。散歩中に得られる情報は脳に刺激を与えることができます。また、体を動かすことによって筋力の衰えも抑えることができ、睡眠の質の改善にもつながります。



園芸療法: 認知症を発症すると時間の変化を感じにくくなってしまいますが、植物を育てることで季節の変化を感じる事ができ、自分が育てているという感覚によって自尊心が生まれるきっかけになる可能性があります。



音楽療法: 過去に流行した音楽を聞くことで、当時の出来事を思い出すきっかけにもつながります。自分の好きな曲や心地よい曲を聞くことで不安が解消され精神的安定を取り戻す効果もあります。



このように様々な非薬物療法がありますが、本人が好むものを選択することが大事であり、楽しみながら取り込めることが重要です。マイペースに、できる限り継続していくこともまた大事なポイントです。

現在、MCI(軽度認知障害)の進行を抑制する方法は非薬物療法しかありません。物忘れが増えたかな?と感じた時にはまず、このような非薬物療法から積極的に取り組んでみるのも一つの手かもしれません。